

誹法無くして此の經を持つ女人は十方虛空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆よりも、草木の露の大風にあえるなるべし。三冬の氷の夏の日に滅するが如し。但滅し難き者は法華經誹法の罪なり。譬へば三千大千世界の草木を新と為すとも、須弥山は一分も損じ難し。縱令七つの日出でて百千日照らすとも、大海の中をばかわかしがたし。設ひ八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て、大小乘の戒行を尽くし、十方世界の衆生を一字の如くに為すとも、法華經誹法の罪はきよべからず。我等過去現在未來の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經誹法の罪なるべし。女人と生まれて百惡身に備ふるも、根本此の經誹法の罪より起これり。

(五〇九頁)

抨誦の善無畏抄は御年五十四歳の時に認められた御消息文です。内容は真言の開祖である善無畏の事跡を述べられた後、善無畏が世間で真言の法を極めた高僧であると言われているのにも拘わらず、いつたんは頓死して地獄に墮ち、ただ法華經の一文を唱えた為に救われて蘇生した事実を挙げられ、真言は權教であり、これを本とすることは大誹法であることを示されているのです。更に善無畏三藏ならびに弟子の金剛智、不空がいずれも天台宗に帰伏し、法華經に帰依した事実をあげられ、權実相対を以て諸宗を破折されているのです。後段は法華經が、得に女人成仏の唯一最高の道であることを述べられ、女人は真心を打ちこんで、法華經を信仰しなければならないと教えられている御書です。

本日抨誦の箇所は 法華經誹法の罪がいかに重いかを強調された段であります。

人の生命は、三世にわたつて永遠である。凡夫として、過去世のことは知る由もありませんが、現在の因果を見て推し量るならば、「我等過去・現在・未來の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは、偏に法華經誹法の罪なるべし」の御文に照らしても、何より過去の姿を示しているといえましょう。私達は、我が身を振り返れば振り返るほど、貪瞋癡をはじめ汚れた生命が己が胸中に渦巻いているのを実感するものであります。

わが身をなげうつて仏道修行に励んでも、なお過去世の法華經誹法の罪障は消滅しがたいとの仰せであります。罪障消滅とは宿命転換であり、それはそのまま「生成仏に通ずるものであります。

故に我々は、いかなる立場にあろうとも、不惜身命に徹した唱題と折伏の実践活動の仏道修行に励んでいくべきであると、仰せられた御書であります。

善無畏三藏は真言の秘法を我がものとして法力を示した人だつたと言わせています。

ところがある時に頓死して地獄へと墮ちてしまつたのであります。その時、獄卒の責めを受け閻魔の裁きを受けた際、その罪を逃れるために、「今此三界 皆是我有 其中衆生悉是吾子 而今此処 多諸患難 唯我一人 能為救護」との法華經の文と南無妙法蓮華經の題目のみを唱え、地獄の責めを逃れて蘇生した。善無畏三藏の墮地獄の根本原因は法華經誹法にあり、その地獄の責めを逃れえたことが出来たのは、法華經を誦した功德なのである、と仰せになつてゐるのです。

特に現今の淨土宗、禪宗は誹法墮地獄の悪法であると喝破(誤つた説を排し眞実を説き明かすこと)されているのです。それが法華經に帰依すれば一切の罪惡は勿論のこと、誹法

の大罪も忽ちに消滅し、一代聖教にいまだかつて許されていない女性でさえ成仏できるのであると仰せになつてゐるのです。

拝讀の御文は、「女人成仏」は、ただ法華經に限る功德で、多宝仏をはじめ十方の諸仏も、その眞実を證明している法門であります。従つて、女性であればより一層に法華經の信心に精進・修行すべきであると、仰せになつてゐるのです。

私達は無始以来からの謗法の罪があり、その罪障消滅のためにお題目を唱えなければなりません。私達が人間に生を受けたのは、お題目を唱えて成仏するためと言つても過言ではありません。

その理由は、「この世界は仏様の世界であり、その中の衆生はすべて自分の子であり、ただ自分のみが救うことが出来る」と經文にあるからです。

このことを信じていけば、私達は正しい信心が出来るのですが、それが信じられずに謗法の罪を作つてしまふのであります。

「犬」とか「猫」に生まれたら、「ワン」とか「ニャン」としか言えません。決して南無妙法蓮華經とは唱えることは出来ません。人間として生まれてはじめて南無妙法蓮華經と唱えることが出来るのであります。このことは眞実なのですが、一念発起して「仏道修行に精進しよう」と決意する人はほとんどいません。それは何故かと言うと、お題目の一遍の功德がいかに広大であるかを知らないからです。

仏法の話は、駅の構内放送と同じで、自分の乗る列車の案内や、興味のある放送には耳を傾けますが、他の案内は聴き取ろうという気持ちがなければ、ただの雑音であり耳には入りますが記憶として残らないのです。ですから、「私達はお題目を唱えるために生まれてきたのである」「お題目の功德は広大無辺である」との二点だけを、自分の命に刻み込むことが大切であります。

お題目の功德について、法華經題目抄（三五六頁）には

「妙と申す事は開と云う事なり。世間に財を積める藏に鍵なければ開く事かたし」

「妙とは具の義なり。具とは円満の義なり」（同三五七頁）

「妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すはよみがえる義なり」（同三六〇頁）

とお題目の功德の広大なることを仰せになつています。

お題目とは、すべての宝を自分のものに出来る鍵であり、すべてを満たすことのできるものであり、あらゆるものと蘇らす力となるものであります。

従つて、妙法蓮華經の根本は「妙」にあり、「御本尊様を拝する時は妙の一宇を見て題目を唱えなさい」という理由はここにあるのです。この世の中のあらゆる功德が「妙」の一宇に具わつてゐるのです。

譬えて言えば、大海の一滴にすべての河の水を納めているように、また如意宝珠（心のままに宝を出すことが出来る珠）は、一珠でも無量の力があるように、一遍のお題目にも如意宝珠同様、広大無辺の功德が収まつてゐるのです。

ですから、法華題目抄（三五三頁）には「南無妙法蓮華經。問うて云はく、法華經の意も知らず、義理もあぢはゞして、只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて、一日に一辺、一日乃至一年十年一期生の間に只一辺なんど唱へても輕重の悪に引かれずして四惡趣（しあくしゅ）におもむかず、つひに不退の位にいたるべしや。答へて云はく、しかるべきなり」と仰せになつてゐるのです。

すなわち、一日に一遍、或いは一月に一遍、或いは年に一遍、十年に一遍、一生に一遍唱えただけで、地獄、餓餓、畜生、修羅の四惡趣（しあくしゅ）には行かず、後戻りすることがない成仏するだけの位に至るという意味です。

では、私達のような者でも一遍でも唱えれば成仏できるのかと言えば、
曰寛上（にちかんじょう）人は、「過去世に謗法が無い人は仰せのとおりである。しかし我等は過去の謗法の罪が無量であるが故、この謗法の罪を滅（めつ）するには一遍という訳にはいかないのである。つまりお題目の功德が広大であつても、過去世の謗法の罪が桁違（けたちが）いに大きく重いので余程唱えなければ無理（むり）である。それゆえ御書の御文には『終に到るべし』と書かれてあるように、最終的（さいしうとうべき）という意味であり、『直ちに』とは書かれていないのである。このことをよく考（かんが）えなさい」と御指南（ごしなん）されています。

私達は久遠の昔より生死を繰り返してきていますが、なかなか成仏できないのは何故かと言えば、「法華經を信（ひ）せず、法華經を誹謗（ひぼう）してきた罪による」と仰せなのです。

こうして考えてくると、私達は「こうしてはいられぬ」と、お題目を必死（ひつし）に唱えていかなくてはなりません。

また私達は、「お題目を唱える」と軽々（けいけい）に言いますが、なかなか成仏できないのは何故とあり、天台大師も「読誦（どくじゆ）し奉る」、曰寛上人も当流行事抄（とうりゅうぎょうじしやう）で「我等唱へ奉る所の本門の題目」と、必ず「唱え奉る」と仰せになつていています。

お題目の功德（こうだい）の広大無辺（こうだいむへん）なることを御存（ごぞん）じの故に、「奉る」と言われてゐるのです。

大聖人様は、唱法華題目抄（じょうほっけだいもくしやう）で、「妙法の二字に諸仏皆收（おおそ）まれり。故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功德（ほくだい）莫大（まくだい）なり」（二三〇頁）と仰せであり、曰寛上人も觀心本尊抄文段（かんじんほんぞんしやうもんたん）で、「故に此の本尊の功德、無量無辺にして広大深遠の妙（みょうゆう）用有（あ）り。故に暫（しばら）くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶（かな）はざる無く、罪として滅せざる無く、福（さいわい）として來たらざる無く、理として顯（あら）われざる無きなり」と仰せになつていています。

御法主日如上人猊下も、常日頃（つねひごろ）の御指南（ごしなん）で、「すべてを開く力（カギ）は唱題行（かうだいぎやう）にあり」と仰せになつてゐるとおりです。

これらの御指南（かくしん）を確信（こうだいしむへん）を持つて実践（じつせん）し、お題目の広大無辺（こうだいむへん）なる功德（こうだい）を実感（じつかん）できるよう、信心（じょうじん）に精進（じょうじん）して戴きたいと思（おも）います。以上を以て本日の法話とさせて戴きます。